

■学校経営のポイント

夏休み、「好き」を見つけよう

喜名 朝博

「好きを育み、得意を伸ばす」。昨年9月の中教審特別部会の「論点整理」に示されたこの言葉は、これからの教育の方向性を象徴するものになりそうだ。

気のせい、TVCM等の広告でも「好き」という言葉が目につくようになった。

「好き」を育む学校

もちろん、学校は好きなことだけをやっていればいいということではない。様々な教育活動や多様な経験を通して、子どもたち自身が「好き」を見出し、育み、得意へと昇華していく過程が重要になってくる。

子どもたちのそんな学びに向かう力を信じ、子どもたち自身が「好き」を育めるように教育活動を進めていくことが、これからの学校の役割となる。

「好き」と思ったことは何だろう

夏休みを前に「これまでの学習で『これ、好き！』と思ったことはどんなこと？」と子どもたちに問いかけてみたい。

それは、4月からの学びの振り返りでもある。「体育の跳び箱が好きになった」「英語が好きになった」と語る子どもたちの「好き」の背景には、小さな成功体験がある。できるようになったことが自信となり、「好き」を育む。さらに、その前段階には「おもしろそう」「やってみたい」といった感情があったはずだ。

逆に、行動することで感情が生まれることもある。「何か難しそう」と文章題に向き合っていた子が、図解してみることで見通しをもち、意欲的になる。さらに、自力解決の成功体験が文章題を「好き」にしていける。

そんな成功体験を提供できたか否かが、これからの授業評価の視点となる。

「好き」は限定的でいい

「体育は好きだけど鉄棒は嫌い」「計算は嫌いだけ

ど、図形は好き」。「好き」は、対象や活動との具体的な関わりの中で生まれるものであり、教科全体ではなく、限定的になって当然である。

大切なことは、子どもたちが、どの教科にも「ここが好き」「これはおもしろい」と言える「小さな好き」を見つけられるようにしていくことだ。「算数は苦手」ではなく、「算数の計算は好き」と言い換えるだけで、学ぶ姿勢が変わってくる。

「好き」を「得意」へと昇華させる

さらに、子どもたちの中に一つでも「好き」が確立されると、子どもたちの学ぶ姿勢は、「どうせ無理」といった固定型から「やれば変わる」という成長型へと変化する。この「やれば変わる」という確信が、不得意を得意に引き上げていくのだ。

そして、好きを得意に昇華させた経験は、「どうすれば壁を乗り越えられるか」という自分なりの攻略法を獲得させ、得意で培ったアプローチを不得意分野でも応用できるようになっていく。

夏休み、「好き」を見つけて育む時間に

「夏休みにしかできないことをしよう」という定番の語りかけも、「夏休みに自分の『好き』を見つけよう」「『好き』を得意にしよう」と言い換えることで、より具体的な夏休みの行動目標となるだろう。

学校で見つけた「好き」をもっと好きになるように打ち込んでいい。自分の「好き」を見つけるために、様々なことに挑戦してみるのもいいだろう。そこで見つけた「好き」を学校での学びにつなげたい。

最近のCMなどが示しているように、人々の購買意欲や行動原理も、みんなに共通の「流行り」から、自分の「好き」にシフトしている。「好き」は、主体性を支える原動力となっているのだ。

(きな・ともひろ＝国士舘大学客員教授／元全国連合小学校長会長)

大人も子どもも自分らしくいられる学校をめざして

対話する職員室

玉置哲也【著】 四六判／定価 2,530 円

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

